

酒井仁 挿絵:桐島サトシ
原作:まくらカバソフト



魔剣士

シネ2

第3巻

乙女穢されし戦場

試し読み版

第10話

邪悪と勇氣

第11話

邪悪の皇子

第12話

最後の魔武具

第13話

崩壊の序曲

最終話

明日への一歩

エピローグ
そして一つの時代は終わりを告げる

番外編

もう一つの未来

008

054

097

142

189

237

250



魔劍士

シネ2

乙女穢されし戦場

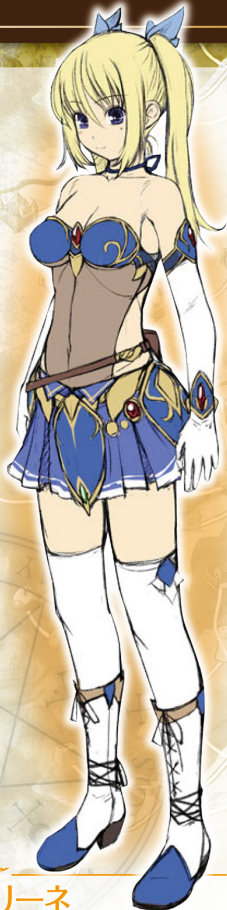
第3巻

魔剣士

リネ2

乙女穢されし戦場

人物紹介



リーネ

騎士の国ストームランス公国の君主。亡き父の後を継ぎ、まだ少女の身でありながら祖国の復活のため奮闘する。

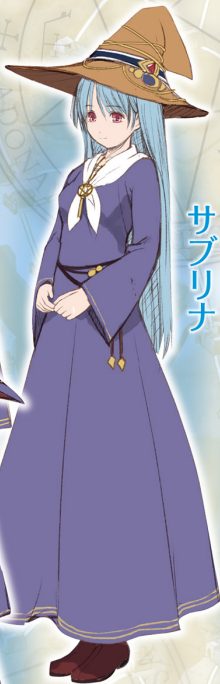


アレス

物語の主人公。ハイランド王国軍随一の知将として名を馳せる。腐敗する王国の現状を憂いている。



ドロシー



サブリーナ

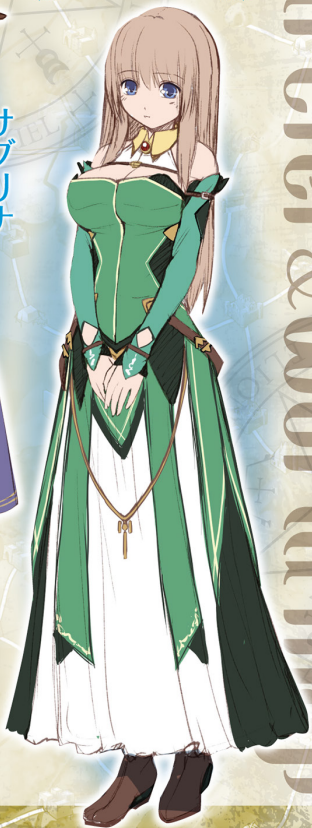
ベアトリス

魔導国家ヘスティア公国を統べる女王。絶大なる魔法力の持ち主



ウエンディ

ヘスティア女王ベアトリスに仕える魔法使い三人衆。
のんびり屋で子供っぽい性格のドロシー。穏やかで大人っぽいサブリーナ。せっかちで怒りっぽいウエンディ。



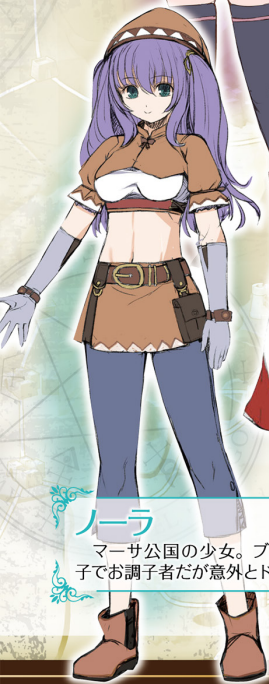
マリオン
アウラ神国の天才技師。シン
シアとは幼馴染で親友。

マリオン



シンシア

宗教国家アウラ神国の女王。アウラの巫女としてアウラ信教の頂点に立つ。



ノーラ

マーサ公国の少女。ブリッ
子でお調子者だが意外とドジ。



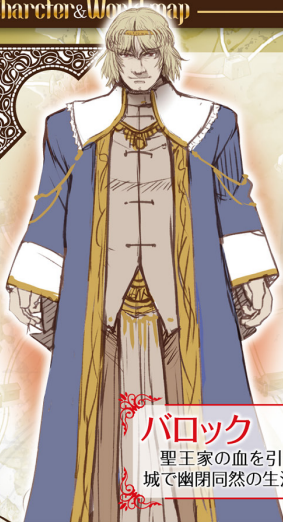
ミュリエル

主人公アレスの妹。修道院で
習った神聖魔法を得意とする。



セリア

南国の島国で一人静かに暮ら
す狩人。狩りの腕は超一流。



カーラ
砂漠の国トリスタン公国の王女。一国の姫君ながら曲刀の腕は超一流。



バロック

聖王家の血を引く貴族。地方の城で幽閉同然の生活を送っている。



第10話 邪悪と勇氣

1

(そろそろ国境の戦況が気になる。早く前線に戻らねば……)

今後の兵站線や負傷者の撤退、魔物に憑依されたヒツピア軍が襲ってきたときの人員配置……それらをすべて整理し、ウォードやランドルフに報告を終えたアレスは、最後に聖王バロックに出陣の挨拶をすべく、後宮に向いた。

あの日……バロックに犯され、悦びに悶えるリーネを見て以来、後宮には二度と行きたくないと思っていたが、これは將軍の責務だ。そも、バロックは政務にほとんどかわることなく、一日の大半を後宮で過ごしている。

苦い気持ちを抱えたまま、後宮に向かうアレスを出迎えたのはシンシア。その姿を見て、アレスはハッと息を呑んだ。

「まあアレス將軍、聖王陛下にご用事ですか」

「は、はい」

なんと青い髪的美少女はいつものポリュミーな体型がくつきり見えるドレスではなく、

ゆつたりとしたマタニティドレスを着ていたのだ。アレスの視線に気付いたシンシアは、少しはにかんだように微笑む。

「ええ、私もようやく聖王さまのお世継ぎを孕むことができました。まだお腹はそれほど目立たないのですが、今からこのドレスに慣れておこうと」

「そう、ですか」

この幸せそうな笑顔ときたらどうだろう。それはシンシアが心の底からバロックの赤子を妊娠したくてたまらなかつたという証拠だ。

「聖王さまに出陣の報告ですね。さあ、こちらに」

シンシアの案内でアレスは三度後宮の奥部に足を踏み入れる。

香が焚かれ、誰の目にも晒されることのない、聖王のためだけの空間。薄いカーテンの前に導かれると、その向こうに人の気配を感じた。

「ああ、バロックさまあ……」

「ふふふ、そんなに舌を突き出して、お前は何が欲しいのだリーネ」

気配は二つ、バロックとリーネ。

リーネは熱に浮かされたように舌つたらずの口調で、ぴちゃぴちゃと舌なめずりをして
いるようだった。

「バロックさまのお、聖王陛下のおちんぼが欲しいです……早くリーネも、ベアトリスやシンシアのようにバロックさまの赤ちゃん孕みたいんです」

うっすらとカーテンに浮かぶ影から察するに、リーネは大柄な男の股間に顔をうずめ、しきりに舌を使っているようだった。

そしてこの後宮において男は基本的に聖王しかない。

（リーネが……あんな媚びるような声を出すだなんて）

ルートヴィッヒが存命だった頃、まだ聖王でなかったバロックは戦闘に参加するでもなく、ただ不平不満を漏らすだけの男だった。

リーネはそんなバロックのセクハラ発言を聞かされるたび、嫌悪感を隠そうともしなかったはずだ。

そんなリーネが今や自分から進んでバロックの陰茎に舌を這^はわせ、その子を孕みたいと甘え、せがんでいるのだ。

先日、アレスの目の前でバロックに犯され、よがっていたリーネの身も心も、今や完全にバロックのものになってしまったということか。

「れるっ、ぴちゃ、ぴちゃ……ああ聖王さまのおちんぼおいひいれす。しよっぱいおつゆがじくじく^じ滲^じんで、ああん、お口の端からこぼれちゃう」



「剣の国の女王ともあろう女が、なんともはしたないことだな。そう言えばお前とともに戦場で過ごしていた男のことはもうどうでもいいのか？」

「ふあ……？ らって、リーネがこの世で最も愛しているのは聖王陛下れすから。バロックさま以外の男なんて、もうどうれもいんれすう」

カーテン越しにうつすら見えるリーネの頭が激しく上下すると、「ぐつぶ、ぐつぶ」と濡れた音が寝室に響く。

口の中、いや喉奥まで陰茎を呑み込み、舌で、唇で、喉粘膜でバロックの茎を刺激しているのだ。娼婦ですらしらないような淫らな奉仕に、アレスは口中が乾くを感じる。

もう自分の知っている女騎士はここにはいない。その事実を見せつけられつつも、アレスは己のイチモツが硬く硬直するのを感じずにはいられない。

「バロックさまあ、この硬くて立派なおちんぽで、リーネに種付けしてくらさいっつ」
「よしよし、む……そこにいるのはシンシアか？」

カーテンの向こうの気配に気付いたのか、バロックが声をかけると、シンシアは満面の笑みで「はい」としとやかに返事をする。

「聖王陛下、アレス將軍が出陣されるとのことで陛下にご報告にいらっしやっています」
「ふむ、それは大儀であったな、アレス」

ぎしりとベッドの軋む音がして、カーテンの向こうに大きな影が揺れる。

姿を現した聖王は何も身につけていない下半身を恥じることもなく、堂々たる半裸身をアレスの前に晒してみせた。

その向こうには呆けた表情で舌なめずりをしている金髪ツインテールの美少女。その瞳にはパロックしか映ってはいない。

「戦況の方はどうだ、そろそろヒツピアを滅ぼせそうか」

「は、しかし連中の背後に何やら不穏な空気があり、なお心してかかりたいと思います」
うむ、とパロックはまるで他人事のように頷く。

「では引き続き、ワシのため、この国のために粉骨碎身するのだぞ。ではもう行ってよいぞ」

そっけなくそれだけ言うと、パロックは踵かかとを返す。

金髪の美少女は待ちかねていたように自ら股を開き、聖王を迎え入れようとしていた。

「待たせたな、リーネ。今日もお前の子宮に我が子種をたつぷりと飲ませてやるぞ」

「ああっ、聖王さま、はやくう、聖王ちんぽでイカせてくださいっ」

シンシアは相変わらず笑みを絶やさぬまま、そっとカーテンを引く。

カーテンで閉ざされたとはいえ、その向こうで何が行われているのか、アレスにはわか

り過ぎるほどわかっていた。

「ふああああつ、入ってきました、バロックさまのおつきなちゃんぽ、おまんこの奥まで届いてるっ。子宮突き上げられちゃうっ」

「今からそんなに気をやつては身が持たぬぞ。心配せずとも、お前が気を失っても犯し抜いてやるからな。お前は今幸せか、リーネ?」

「し、あわせれすう、リーネは、リーネは世界一幸せな女の子れすう。あひいい、イク、入れられただけでもうイッちゃいますううう!」

気がつけばアレスはリーネの嬌声きょうせいを聞きながら、ぎりつと唇を噛みしめていた。だが、アレスにはこの場を立ち去るより他に何もできなかつたのであつた……。

2

ダイヤモンドシティを発つて数日後、アレスは再び国ざかいの最前線に戻っていた。カシムを喪うしない、一時は勢いを弱めていたヒツピア軍だが、エルヴィンの報告によると再び攻勢を強めているらしい。

「というより、ヤツら以前よりも必死で攻めてきているんだ。そして……これを見てくれ」「これは、またもや魔武具か」

魔武具に魅入られた敵将はどうか討ち取ったものの、後にはやはりおぞましい邪気を伴った鎧が残されていたのだ。

「ミュリエルもご苦労だったね。エルヴィン、ミュリエルとセリアを伴って魔武具を王都に持ち帰ってもらえないか。キミらはずっと最前線で戦い通しだろう」

確かに連戦に続く連戦で、エルヴィンたちにも疲労の色が見える。

しかし、セリアが前線に残ると言い出したのだ。

「リーネさまが戻ってこない以上、これ以上戦力を削るのは得策じゃありません。それに……アレスさんのこと、心配です」

一度こうと言いつつ出したらセリアは決して自分を曲げることはない。それはブルデイ島を出るときからわかっていた。

やむを得ず、アレスはエルヴィンとミュリエルに魔武具を託し、自ら陣頭指揮を執ることにしたのだった。

翌日、エルヴィンたちは負傷した兵を伴ってダイヤモンドシティに向かった。だがその顔からは緊張が取れないでいた。

「ミュリエル、気付いていたかい。アレスは明らかにヘンだった」

「ええ、それにリーネさまたちも戻ってくる様子もないし、王都で何があったというのか

しら」

しかし補給線を確保し、負傷者を国に戻すことも、魔武具を浄化することも重要事。アレスの身を案じつつも、エルヴィンは魔武具を携えてワインバーグ神官長を訪ねた。

「またも魔武具がヒツピアの手に……やはり背後に魔族の謀を感じますな。この鎧は一際邪気が強い。おそらくシンシアさまでないと浄化は無理でしょう。直ちに取りはからいましょう」

「そうしていただけると助かります。ところでシンシアさまやリーネさまは今どちらに」
そこで初めてエルヴィンはハイランドの同盟三国の女王たちが、バロックの後宮で過ごしていることを聞かされたのだ。

（あの噂は本当だったのか。アレスの様子がおかしかったのも、そのためだろうか）

その後、エルヴィンは雑事に追われることとなったが、シンシアによって魔武具は無事に解呪され、「聖鎧オリオン」を手に入れたのだった。

（この聖武具が少しでもアレスの力になってくれればいいのだが）

ときを同じくして、最前線の戦場でアレスはセリアとともにヒツピアの撃退に追われていた。

「セリア、あまり突出するんじゃない、キミは後方からの支援を！」

「は、はいっ」

狩人として超一流でも、セリアはもともと兵士ではない。

しかし今少女を突き動かしているのは、アレスがいつになく沈み込んでいるからだ。た。私に少しでもできることがあれば。アレスさんの力になりたい）

その日もどうにかヒツピア軍を退けることに成功したアレスたちは、見張りを強化するとともに兵たちに十分な休養を取らせることにした。

総指揮官であるアレスは、砦の一室を使っている。兵たちの目がないところだと、さすがのアレスも張り詰めていた気が緩み、大きく息をつく。

体力的には余裕があるが、若き將軍の心は倦み疲れていた。脳裏からは、バロックに犯され、だらしなくよがっているリーネの姿が離れない。

（いや、もう少しだ。ヒツピアの脅威が去れば、この国も大陸にも平和が訪れるだろう）

しかし、そのときバロックの傍らには聖王の子を孕んだ二人の女王がいるに違いない。それに魔族の動向もまだ判明していない。ここで気を抜くわけにはいかないのだ。

と、そのときアレスの私室にノックの音が響いた。

「あの、アレスさん。少しよろしいでしょうか」

「手の中もふかふかですげえ！ うおおおんっ」

もはや彼らを見て騎士と思うものなど誰もいないだろう。

下半身は丸出し、ベッドに押し倒された美女の顔や手を暴力で貶め、陵辱する卑劣漢でしかない。

「おほおおお、出るウウウッ」

「ぐひいいいっ」

どびゅっ！ びゅばっ、びゆるるるる〜っ。二発目とは思えないほど大量の白濁がクロエの顔に、首筋に、手の平の中にまき散らされる。

どうにかまだ乙女の純潔は守られているものの、既にクロエの姿は汚されきった哀れな供物。

（人は……本当に人はこんなにも心弱いものなの？ どんな誇り高い人間も、快楽の前には無力だというの……）

今までかろうじて耐えていた集中が途切れ、ふっと下肢から力が抜けるのをクロエは感じた。

そんな哀れな乙女を前に、騎士たちはまだ浅ましく腰を振り続けている。その姿はまぎれもなく、肉欲にまみれたただの動物。

「どうやら、自分たち人間がいかに低劣な存在であるか、理解できたようだな、クロエ」
「……………」

言い返せない悔しさにきゅつと唇を噛みしめると、口の中に精液の味が広がった。
しかし、もう抵抗する気力はクロエには残されていない。

「……………あっ？」

ぐいつ。

さつきまで執拗に花卉を擦るだけだったヘルメスの肉凶器の動きが変わった。握りこぶしで押されたかと思うほど巨大なモノが、乙女の処女肉を僅かに押し広げたのだ。

「っ！ あっ、だ、駄目」

にゆる…………ぐ、ぐいつ！ 肉柱は侵入しかけて再び下がる。だがまたすぐに、さつきより深くねじ込まれ、クロエは激痛に目を見開いた。

「い、いた、痛い…………っ」

にゆるっ、ぐ、ぐぐううっ。引いては突き、引いては突きの動きが徐々に、徐々に大きくなっていく。

いかに念入りにほぐされ、膣穴が蜜で満たされていたとしても、それはあまりにも巨大過ぎた。

「いぎいい、ぎいいいい！」

「まだ亀頭の半分も入っていないし、処女膜にも達していないぞ。それに聖王の力はどうした？」

みしつ、めき、ぎぎぎぎ……膣肉は無体な侵入者を懸命に拒むが、悪魔的陰茎は鋼鉄の槍よりも硬い。

あの不気味に巨大な先端部の半分も入っていないと聞いて、クロエは総毛立った。あんなものを入れられたら、自分の股間は完全に破壊されてしまうだろう。

「やめ……痛い、こ、壊れ……こ、ころさ、ないで……」

とぎれとぎれに漏れる己の言葉に、クロエは涙がこぼれ落ちるのを止められない。どうあがいても、自分はこの悪魔には勝てないと本能で悟ってしまったのだ。

悪魔の陰茎で処女を引き裂かれて突き殺されるといふ死の恐怖を前に、命乞いをしてしまったのだ。

（ごめんなさい、アレスさま……）

こんなにも弱い自分が、一人前の女騎士を気取っていたのが情けなく愚かしい。負けるにしても、剣を取って返り討ちにあった方がよかった。

「うう……ううっ、うっ」

すすり泣くクロエの乳房を騎士たちの陰茎が突きまくる。その惨めな光景にヘルメスは邪悪な笑みを浮かべ、どんだん腰の動きを大きくしていく。

破瓜の痛みは限界に達したのか、激痛は疼痛に変わり、じんじんと麻痺しているようだ。「そんなに悲観することはないぞ、クロエ。それに、そのうちその苦痛も快感に変わる」

「そんな、こと……あつ？」

みりりつ、と一際深く陰茎が押し入ってきた。クロエは剣で刺されたような激痛と、背筋が痺れるような快感に同時に襲われ、身体が勝手に痙攣を始める。

次の瞬間、クロエは自分の口から「あはあんっ」という甘ったるい声を確かに聞いた。

「どうだ、お前の処女膜、しかと引き裂いてやったぞ。だが苦痛はこれで終わりだ」

「あ……あひ……」

めきめきめきつと肉柱がさらに深く打ち込まれ、処女肉は内側から強引に押し広げられる。どう考えても限界を超えているはずなのに、クロエは苦痛ではない感覚に口をぱくぱくさせ、言葉も出ない。

「私の先走り汁には強い催淫効果があるのだ。処女穴に私のデカマラをぶち込まれても、お前はもう快感しか感じることはできない」

「うあ……あ……は……っ」

「まだまだ入っていくぞ、処女子宮を思うさま突き上げてやろう。それでもお前は苦痛ではなく、快美の声しか上げられない」

挿入がさらに深まるが、それと同時に快感レベルも跳ね上がる。下腹部の奥をこつこつと突かれるたび、頭の中で白い光が幾つも瞬いた。

(なにこれ……こんな知らない、こんな初めて……これが……)

「そうだ、これが女の悦びというやつだ。もつともつと気持ちよくなっていくぞ」

ヘルメスの動きが一気に加速する。大人の肘よりも太くて長い超巨根が膣肉を擦り立てて引き抜かれ、押し込まれ、とうとう根元までクロエの胎内に収まってしまった。

「あ……ひ、いいいい……」

それはセックスなどという生易しいものではなかった。

魔淫液の作用とヘルメスの巧みな腰使いによつて、否応なく一方的に快感を注ぎ込まれる、「快感」という名の拷問にも等しい。

にゅぽっ、ずぼぽぽっ。魔槍が茎の半ばほどまで引き抜かれると、肉の合わせ目からぷし、ぷしゃつと透明な液が噴きこぼれる。とめどなく溢れるクロエの愛液だ。

「いひいいいいっ、いいっ、こんな、こんなならめえ、ヘンになる、ヘンになっちゃうううう」



バロックはシンシアの背後に回り込むと、そつと太い腕で少女の身体を包み込み、丸々膨れたお腹を撫でる。

（ああ、バロックさまの分厚い手の平）

聖王の陰茎で犯され、子種を注がれ続けたシンシアは、身も心もバロックに委ね、安心しきっていた。ゆえにヒップに硬いものを感じても、むしろ自分から尻を突き出しさえしたのだ。

「ふふ、お前はすっかりこのマラの虜なのだなシンシア」

「もちろんでございます。陛下の御子を産むまでとはいえ、これがおまんこで味わえないのがつろうございます」

ふむ、とバロックは少女の耳元に息を吹きかけると、腹部を撫でまわしていた手を乳房と太腿に滑らせる。

右手でぐいと乳房を露出させ、左手は太腿を持ち上げる。シンシアは既に下着を着けていなかった。むき出しになった花びらからは、既に透明な蜜液が垂れ落ちていた。

「ああ陛下、どうか今宵はシンシアのお尻の穴を可愛がつてくださいませ」

首を捻るようにしてキスをせがむと、分厚い唇がそれを塞ぐ。ぴちゃぴちゃ舌を絡ませていると、乳房を弄っていたバロックの右手がもう片足を持ち上げ、シンシアは赤子のよ

うに持ち上げられてしまったのだ。

いつの間に取り出したのか、尻に押し当てられている熱いものはバロツクの陰莖。脈打つ肉棒が尻の割れ目で擦り立てられ、シンシアの胸はいつそう高鳴った。

「陛下っ、お、お尻……お尻に欲しいです。陛下のおちんぼ欲しいッ」

とてもアウラの聖巫女とは思えぬ淫語を発して身悶える少女に、バロツクはにんまりと罪深い笑みを浮かべた。

そして、隆々と振り返った肉棒の先端をぐりぐりと尻の奥に潜らせたかと思うと、ほぼ真下からシンシアのアヌスを突き上げたのだ。

「ああああ……っ！ バロツク、さま……なんだか、いつもより太いい」

尻を犯されるのが久しぶりだからそう感じるのか、シンシアは挿入されただけで軽く達していた。しかも両脚を抱え込まれた体勢なので、自分ではどうすることもできない。

はしたないM字開脚状態のまま、ゆっさゆっさと上下に揺すられると、両の乳房とボテ腹が重たげに揺れる。

「ひっ、すごいです、おちんぼがケツ穴をこすって、ああああお尻気持ちいい、きもひいいいっ」

ずるるっ、ぬぶぶぶっ。ずる、ぬぶううっ。シンシアもそう小柄な方ではないのだが、

パロツクの膂力りよりよくは妊婦を軽々と持ち上げ、思う存分その尻穴をえぐり続けた。

「あひ、はひいい……」

それだけ激しく尻を犯されているというのに、シンシアの左手は無意識に己の股間に向かつていた。

やがて赤子が生まれてくるであろう産道、蜜液に濡れそぼった花びらを指で弄り、クリトリスを指の腹で激しく擦り立てる。

（ああ、あんまり奥まで指入れちゃいけないのに、気持ちいい、おまんこ気持ちいいよお）
既に妊娠十ヶ月を迎えているとはいっても、膣穴深くに指を突っ込んでいいはずもない。かろうじてシンシアの指は膣口付近にとどまり、花卉やクリトリスを弄ることで、どうか我慢していた。

だが、ずんずんと直腸を突き上げるパロツクの肉棒は容赦を知らない。ずにゆつ、じゅぼじゅぼと肛門肉がめくれあがる快感にシンシアは我を忘れ、いつしかめちやくちやに大陰唇をかき回していた。

「あんつ、イクいくイク、シンシア、お尻でイッちゃいますっ」

凄まじいアクメの波が押し寄せ、シンシアを呑み込む。シンシアはもう無我夢中で大陰唇を擦り立て、舌を突き出して悶えよがる。



ぐつぶぐつぶと淫らな音を立てて唇で擦り立てるその淫技に、カシムは快美の声を上げ、自ら腰を振り立てて乙女の喉を深く犯す。

「相変わらずエロい吸い付きだぜ……あの小娘たちははなから相当仕込まれてたが、お前は俺に犯されるまで処女だったものなあ」

だが、とカシムはにやついた顔でベアトリスのフェラチオを堪能する。

「けど、処女のくせにケツ穴とフェラテクだけは仕込まれてて、なんてドスケベな処女かと驚いたぜ」

「んっ、は、恥ずかしい……です」

そう、ベアトリスは処女だけは守られたまま、オーウエンにフェラチオと肛門性交だけはみっちり仕込まれていた。

カシムは尻穴を指でえぐられ悶えるベアトリスに驚きつつも、その淫らさに満足し、悠々とその純潔を奪ったのだった。

「どうだ、ちんぽをしゃぶってるだけで、ケツ穴が疼いてしょうがないんだらう？」

「は、はい。カシムさまの立派なおちんぽで、はしたないケツ穴をズコズコ突かれました」

淫語を口にする、アヌスがきゅんきゅん締まるのがわかる。しかしカシムはわざとフ

エラチオだけを要求し、ベアトリスの口内を堪能する。

「心配するな、あとでたっぷりとケツにもぶち込んでやるよ。だがまずは口からだ。今日も俺さまのザーメンで胃袋を満たしてやるからな」

興奮の極みに達したのか、悪党は美女の頭を両手で掴み、激しく腰を振り立て始める。亀頭に喉奥を突かれて息が詰まりそうになるが、その哀れな様子すら、男の欲望を煽る痴態でしかないのだ。

「おおおっ、い、いくぞベアトリス！」

「んううっ、んんん~~~~っ」

びくびくと口の中で茎が跳ね、そのたびにどろりと濃厚な体液がベアトリスの喉を滑り落ちていく。

牡の粘液が喉粘膜を焼き、鼻孔から漏れる息にまでザーメン臭が混じっている。

今夜はあと何回、この臭い汁を飲まされるのだろう。もうどんな食物を食べてもザーメンの味しかしらない。おそらくもう一生そうなのだろうとベアトリスは思った。

目尻が熱くなり、脳裏に一瞬だけ誰か若く逞しい青年の面影が浮かんだような気がした。しかし記憶はすぐ曖昧なものになり、ベアトリスは頬をすぼめて、茎に残ったカシムの体液を吸引するのだった……。

「カーラさん、せめてスープくらいはお飲みになりませんか。最近、母乳の出が悪いと傍付きのものが……」

優しくかけられたシンシアの声に、しかしトリスタンの元王女はまったく反応しない。目はうつろだが、傍らですやすやと寝ている赤子の頭を優しく撫でている、その仕草がかえって哀れさを感じさせずにはいられない。

ここはアウラ神国……いや「元」アウラ神国と呼んだ方がいいかもしれない。今この国を支配しているのはヒツピアの猛将マンズールなのだから。

「シンシアさま、マ、マンズールさまがお呼びでございます」

乳母を務めている初老のメイドがおずおずと述べる。メイドは聖巫女であるシンシアに対する敬意は持つていても、カーラに対してはあまりいい印象を持つていないようだ。

だがそれも無理からぬこと……カーラは征服者マンズールの肉奴隷に墮とされた身であり、今はその赤子とともにアウラ神国に面倒を見てもらっている、厄介者でしかない。

「カーラさまとお子さまのこと、くれぐれもお願ひするわね」

シンシアの言葉にメイドは恭しく頭を下げるものの、カーラはまったく無反応。自分を陵辱したマンズールの赤子を産み落として以来、カーラの心はどこかに行ってしまったか

のようだ。

（あまりにつらいことが多過ぎて、カーラさんの心は正気を保てなくなってしまうたんだわ）

だが、マンズールに慰みものにされているという点では、シンシアもカーラと大差のない立場であった。

カシムがヘスティアの支配者となったように、マンズールは三人の女王のうち、シンシアを所望し、今やシンシアもマンズールの子を宿しているのだった。

「おお、なにをしておったシンシア。またあの女のところか」

アウラの玉座……そこはもともとシンシアが聖巫女として様々な神託を行う場所でもあったのだが、今やマンズールの指定席。

両脇に若い半裸の侍女を従え、大ぶりの杯に注がせた酒を一気に飲み干す。もう既にかなり酔っているのか、下半身の着衣は乱れ、そこからよきりと巨根が天を仰いでいる。シンシアは思わず目を逸らす。

「どうした、お前に種付けをやってやった我がマラではないか。そら、さっさとこっちにきて我がマラに挨拶をするのだシンシア」

シンシアはなお目を逸らしつつ、するすると薄布を脱いでいく。マンズールに奉仕をす

るときは全裸と決められているからだ。

リーネと違って戦闘経験のない女体はどこまでも曲線でできていて、それだけに膨らんだ妊婦腹がよく目立つ。

「あの、どうかカーラさまのことはあのままそつとしておいてあげてくださいませんか、マンズールさま」

シンシアがこの巨漢に逆らえないのは、それが理由の一つ。シンシアが庇わなければ、この悪党は心を失ったカーラをどんな酷い目に遭わせるか知れたものではない。

そしてマンズールは、そんなシンシアの優しい心根を知った上で、敢えてカーラを城に匿い、シンシアの身も心も縛りつけているのだ。

（私が我慢すれば、カーラさんは安全でいられる。私さえ我慢すれば）

シンシアはマンズールの足元に跪いて股間に顔を寄せていく。勃起した肉棒からは既に異臭が漂っている。

酒に酔っているせいか、いつもより臭いがきついような気がするが、拒否することは許されない。シンシアは舌を伸ばし、亀頭の周辺の白いかすのようなものを、愛らしい舌でねぶり取っていく。

（うう、気持ち悪いです）

フェラチオももう何十回させられたかわからないほどだが、マンズールは身綺麗さや清潔とは縁遠い男。シンシアを犯すときもいつも汗みどろになるまで腰を振り、体液にまみれたまま眠るような男である。

だが、この苦くて臭いチンカスを舐め取り、飲み込まないとマンズールは満足しない。

「むふふふ、あのカーラという娘は最初はお前と違って気の強い娘だな。奥歯が折れ飛ぶほどひっぱたいてやっても、なかなかちゃんぽをしゃぶろうとはしなかったほどだ」

こんな大男があんな小柄な少女を殴るだなんて、信じられない。シンシアの知っているあの青年なら、決して女に手を上げるようなことはしなかっただろうに。

（あれ……今私、誰のことを思い出していたんだろう）

ぴちゃぴちゃ、じゅぷじゅぷ……臭い肉茎を舌で舐め清めるうちに、ふと脳裏をよぎった面影は一瞬で消えてしまった。

それだけでなくとも巫女でありお姫さま育ちのシンシアは、ごく最近フェラチオなどという性技を会得したばかりなのだ。

それまでではまさか口で男性器を刺激するなんて、想像もしていなかった。意外にもマンズールはシンシアに乱暴を振るったりすることなく、むしろ手取り足取りベッドテクニクを教え込んでいった。

(いけない、ちゃんとしなくちゃ私だけじゃなくカーラさんと赤ちゃんが酷い目に遭わされちゃうかも)

そう、マンズールはシンシアを大事に思っているわけではない。

やろうと思えば素手でシンシアを半死半生の目に遭わせられる、その自信がある故に親切気に振る舞っているに過ぎないのだ。

「うむうむ、次は頭を前後に振って、その愛らしい唇で我がマラをしごき立てるのだ。お、いいぞ」

言われるままに懸命に頭を振り立てるシンシアの蓄つぼみのような唇に、凶悪な巨根が出入りする。

あまりの大きさに顎が外れそうになり、唇の端から涎が垂れ落ちるが、それを拭う余裕もない。

「うほっ、いいぞその調子だ！ むん、むうんっ」

禿頭をのけぞらせ、マンズールは腰をカクカク震わせる。シンシアは両手を胸の前で組み、まるで祈りを捧げるように目を閉じ、ペニスの突き入れにただ耐え続ける。

「むおおおっ！」

どびゅどびゅとものすごい勢いで放たれる毒液を、シンシアはうつすら涙を浮かべつつ

呑み下していく。その熱と量に朦朧とする元聖巫女の脳裏には、先ほどよぎった青年の顔など残ってはいなかった。

「ふっふっふっ……」

悠然と玉座に座った大男の足元に、金髪ツインテールの少女が跪いていた。凜々しい強化服に身を包んだその美貌は気品と怒りに満ちていたが、巨漢は気にする様子もない。

巨漢の座る玉座は、かつてはグスタフという男が、そしてルートヴィッヒ、バロックと短い時間の間に次々と持ち主を変更していた。

ここはハイランド王国——いや、ハイランドと呼ばれていた国。そして今はヒツピア帝国領となったダイヤモンドシティであった。

「まだ屈する気はないという顔だな、リーネ。故国を遠く離れ、この城にただの一人も味方がいないというのに、大したものだ」

「誰が……誰がお前のような男に屈するものか！」

剣の国ストームランス公国の女王リーネ。しかしハイランドとその同盟三国がヒツピア帝国に敗れ去った今、ヘスティア公国はカシムが、アウラ神国はマンズールが治世権を持つことになった。

ストームランスは、ヒツピア王家の他の王族が数名で治めているようだが、実際のところ、彼らが一般市民に対し、暴力や略奪をおこなっていない保証などどこにもない。

(ストームランスのみんな、無事でいて……)

リーネがストームランスではなく、ここダイヤモンドシティで虜囚となつているのは理由がある。ヒツピアの皇帝であるアクラムが最も国力のあるハイランドを治めるため、そして同盟国の中でいちばん戦力と士気の高いストームランスを牽制するためだ。

騎士団長ランドルフや弓の名手キースらはストームランスに送り返され、反乱を起こさぬよう監視されているということだ。

ベアトリスは大魔導士、シンシアは聖巫女であるが、こと戦闘に関してはそれほど指揮能力は高くはない。アレス亡き後、ヒツピアにとっていちばん脅威となりうるのはストームランス、そして女王リーネであった。

「それより、バロック陛下はご無事なんでしょうね！」

「ふふ、あんな能無し、生かしておく理由もないのだが……まあ地下牢で静かに暮らしておるよ」

そう、これがリーネがハイランドを離れられないもう一つの理由。

ルートヴィッヒを失った今、聖王の血を継ぐのはバロックを置いて他にいない。バロッ

クはまだ儀式を経て真の聖王にはなっていないが、うまくバロックを逃がすことができれば、彼は反逆の御旗となりうる。

バロックの護衛のため、ホーリーヒルを離れていたリーネは、既に儀式に必要な「王の石版」が破壊されていることを知らされていなかった。否、アクラムは敢えてそのことをリーネに教えてはいなかったのだ。

（今に見ていなさい。そのときは、今までさんざんされた分、目のもの見せてやるわ）
少女の脳裏に、共に戦った若者の顔が浮かぶ。ろくな増援もなく、それでも砦に立てこもってヒツピアと激闘を繰り広げた將軍アレス。

しかし、アクラムらの身につけた魔武具の前に、彼はついに力尽きた。彼の無念を思えば、リーネは心折れるわけにはいかなかった。

「リーネ女王、お前がこのアクラムに従っている限りは、あの能無し聖王の首も繋がるというもの。せいぜいワシを楽しませるのだな」

くつくつくと悪辣に笑うアクラムの甲冑が不気味なオーラを放つ。彼らがどこでそんなものを手に入れたのかは知らないが、魔武具の力は本物だ。

（今は、耐えるしかない……耐えるしかないのよリーネ）

キッと睨みつけるリーネの視線をむしろ楽しむように、アクラムはかちやかちやとベル

トを緩め、股間のイチモツを取り出した。

によきりと天を仰ぐ肉棒を露出させたまま、それ以上何も言わない。だがリーネは唇を噛みしめると、おずおずとその巨大なる肉の竿に指を絡ませたのだ。

（男つて、どうして女にこんなことをさせたがるの？　こんなことであたしを服従させてると思つたら大間違ひなんだから）

リーネはこれまで人型の魔物や海賊といった連中に、幾度か辱めを受けてきた。執拗な愛撫を受け、身体が熱くなったこともある。

しかし、皇帝アクラムはなぜかまだリーネの処女を奪つてはいなかった。絶対に反抗できない状況に追いやりながら、こうして時おり陰茎をしごかせたりして、誇り高き女王のプライドを侮辱するのだ。

「ふむ、マラしごきは一向に上達せぬな。そんな手つきではいつまで経つても射精できぬぞ」

アクラムがこう言い出すのもいつものことだ。彼はリーネの服を脱がすこともなく、凛々しき女騎士の格好で陰茎をしごかせる快感に酔っている。

と、おもむろに伸びてきた太い腕がリーネの金髪ツインテールを掴んだ。そうして力任せに引っ張ると、乙女の白く小さな顔に赤黒い肉棒が押し付けられる。

「痛ッ、か、髪を引つ張らないで……ううっ、臭いッ」

もちろんリーネはやすやすとそれをくわえたりはしないし、アクラムも命令しない。ただゴリゴリと裏筋でリーネの頬や額を擦り、引き結んだ唇を亀頭に擦りつけるだけだ。

それでも、先端から滲み出た臭い汁は少女の肌を穢し、つんと鼻孔を刺激する。アクラムはおそらく、リーネを侮辱するためだけに股間をわざと洗っていなかった。

「おえっ、げほごほっ」

立ち上る異臭に咳き込むと、すかさず先端を口にねじ込もうとする。

何度かリーネは憎き怨敵の急所に歯を立ててやろうとしたが、アクラムの巨大過ぎる肉棒には、僅かに歯が食い込むだけであった。

「ほうほう、わざわざ歯を立ててワシのマラを刺激してくれるのか、クク、なかなかサービスが行き届いていないか」

これまでいっただいどれほどの数の女を犯してきたのか、皇帝のそれは淫水焼けし、なめた革のように強靱。少女のか弱い歯では、痛みよりむしろ快感を与えてしまう。

「くうっ、い、いい加減放しなさいよこのっ」

ペニスを吐き出して罵倒すると、いよいよアクラムは鼻息を荒くし、のっそりと腰を上げた。

猛将マンズールもかなりの巨漢だが、ヒツピア皇帝の迫力はそれ以上。胸板の厚さ、腕の太さ、両脚は地に根が生えたようだ。

振り返った竿の下に、巨大な二つの球体が重たげにぶら下がっている。毛むくじやらのそれを見せつけるように腰を突き出すと、いよいよリーネには逃げ場がない。

いや——そもそもバロックの身柄をpushさえられた時点で、リーネにはこの外道に従うより道がない。

「く……」

「そう言えばお前の友人たちはどうしておるのだろうか。それぞれの故国に帰って、さぞ平穏な日々を過ごしていることだろうか」

悪魔のような笑みを浮かべるアクラム皇帝に、リーネの背筋がぞつとする。この悪漢の言う「友人たち」とはすなわちベアトリスとシンシアのこと。そして彼女たちもその国をマンズールとカシムに簒奪され、ヒツピアに占領されているのだ。

「どうだ、お前も久しぶりに友に会いたいだろう。近々、顔を合わせる機会でも設けてやろう。ワシはこう見えて女には慈悲深い男だからな、がっはっはっはっはっ！」

高笑いするや、アクラムはリーネのツインテールを強く引っ張り、股間を乙女の顔に押し付ける。

むつと汗臭い臭気と頬にへばりつく恥垢の不気味な感触にぞわりと肌が粟立つ。無駄とわかっていても、反射的にアクラムを押しつけようとする、その健気な抵抗を楽しむように、ヒツピア皇帝は少女の顔面をまるで雑巾のように使うのだった。

（あたしはまだ諦めない！ 生きてさえいれば、きつとバロック陛下だって救い出せる、希望はある！）

つんと鼻を突く臭気は、新たな先走り汁が分泌されているからだろう。アクラムはがはがはと下品な笑いを上げながら腰を振り立て、未だその純潔を奪うこともしていない乙女の美貌に、ぐいと尿道を向けた。

「んひっ!!」

どびゆるるゝゝつ、びゆるつ、びゅばあああつ。一瞬、視界が閉ざされるほど大量のザーメンが、リーネの顔面一杯にまき散らされる。

白濁液は糊のように粘っこく、とても目を開けられない。口を開けてしまうとアクラムは容赦なく亀頭をねじ込んでこようとすする。

「がっははは、頼むからこの程度で壊れてくれるなよ、剣の国の女王！ ワシのザーメンはまだまだ金玉に詰まっておるぞ」

んふうー、んふうーと鼻だけで息をするが、牡の粘液は鼻孔からも押し寄せ、喉に滑り

落ちていく。

何度も咳き込み、えずき、少女がぐったりとするまでアクラムの陵辱は止まらない……。

3

その日、ダイヤモンドシティに招聘しょうへいされたのはマンズールとカシム。もちろん彼らの傍らには捕虜となったベアトリスとシンシア……いや、彼女たちの扱いは、捕虜などという甘いものではなかった。

完全武装のヒッピア騎馬兵を連れているのは禿頭の巨漢と鋭い目をした若者。ハイランドの一般市民たちに対し、征服者として君臨している自分たちの姿を見せつけるような行進の中に、ベアトリスとシンシアの姿がある。

二人ともいちおう王族用の馬車に乗り、身なりこそ整えられているが、やつれぶりは誰の目にも明らか。

しかも兵士の手を取って馬車を降りた二人の女王の姿に、ハイランドの市民も、そしてリーネも息を呑む。乙女たちの腹部は丸々と膨れ、明らかに臨月間近の妊婦腹をしていたのだ。

「そんな……ベアトリス、シンシアまで……」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

COMIC BY
天道まさえ

原作:まくらカバースoft

大人気同人ゲームのコミカライズ!
電子限定で好評連載中!!

魔剣士
マサ the COMIC
Leane of Evil Blade

魔剣士

シネ

Leane of Evil Blade

原作: まくらカバースoft

小説: 空蟬

挿絵: 桐島サトシ

独特のシステムで好評を博した
大ヒット同人ゲームが
衝撃のノベルライズ!!



全国書店、各電子書籍サイトにて
好評発売中!